

耳よりな話

N.43

平成 25 年 7 月 22 日発行

(労働・社会保険ニュース)

阿部年金労務管理研究所

阿部 純二 (社会保険労務士)

〒194-0045 東京都町田市南成瀬 5-25-14

Tel 090-1200-1526 Fax 042-722-1526

E-mail: abenenkin@ybb.ne.jp

<http://nenkinsodan.web.fc2.com/>

日本の人口は…

厚生労働省は平成 24 年 1～12 月の人口動態統計を発表しました。日頃あまり意識しないものなので、以下に記述します。

出生数は 103 万 7 千人 (昨年比 1 万 4 千人減)

死亡数は 125 万 6 千人 (昨年比 3 千人増)

合計増減数は 21 万 9 千人減となりました。

合計特殊出生率は 1.41 となり、昨年比 0.02 増でした。

我々が小中学生の頃は、日本は資源がなく人口が多すぎるため、なかなか貧乏から脱却できないと教わってきましたが、これからは極端な人口減少に悩まされる事態になってきました。

【おことわり】

「耳よりな話」にてお知らせする年金等の内容につきましては、平易な文言にてその骨子を説明することを心掛けております。従いまして、法令条文通りの厳密な解釈や例外規定の適用に拠っては該当しない人もいます。その旨をご理解頂きますよう、更に詳細が必要な方は別途お問い合わせください。

* 既発行の「耳よりな話」は <http://nenkinsodan.web.fc2.com/> をご覧ください。

吟詠

詩吟の愛好者は非常に多く、根強い人気を保持しています。

長年詩吟を愛好し、今や趣味の域を超え吟詠師範(鶴翔流吟詠会宗家代範)として教室での指導にご多忙な毎日を送っておられる江尻 一征(えじり かずのり)さんに、詩吟に関する随筆をお願いしました。

氏は、全国吟詠コンクール、全国合吟コンクール、日本詩吟協会コンクール、ピクチャーコンクールなど各種コンクールに入賞しておられます。

江尻 一征さんは鹿児島県ご出身、昭和41年早稲田大学理工学部を卒業後、外資系企業に就職されて内外で活躍したあと起業し、同時に名古屋商科大学の講師として学生の指導にもあたってこられました。

その誠実なお人柄からいろいろな会役員を委嘱されてご活躍の傍ら、囲碁、油絵と多彩なご趣味の他に長年座禅会にも出席されています。

前号に引続きその最終回をご紹介します。

六．漢詩と吟詠

吟詠は現在では、漢詩のほかに和歌・俳句・新体詩などを歌詞とし、ほかに和歌・今様・民謡・歌謡曲・童謡などと一緒に吟じることが多くなっている。しかし主体はあくまでも「漢詩」であり、吟詠修得上、ある程度の漢詩の知識は欠かせない。漢詩は中国の漢の時代に初めて作られたのでその名前があるが、漢詩の形式や作詩法が確立されたのは唐の時代であり、今日、「漢詩」と呼ばれるものは、全て唐詩を指すと言っても過言ではない。

漢詩の形式は、大きくは「古体詩」と「近体詩」に分かれる。「古体詩」は作詩法が比較的緩やかで「古詩」と「樂府」からなり、「古詩」は詩全体の長さが一定せず、中には百句(行の意味)を越える歴大な詩もある。吟詠ではこのうち特に六句(行)のものを六行詩、十句以上のものを長詩とよんでいる。また、古詩では、平仄押韻等の作詩法が絶句や律詩のようにきびしくはない。「古詩」には四言・五言・七言の形式をとりすべて唐以前の詩体である。

七．吟詠に親しみ修得できた事々

吟詠のための構成要素は、言葉、発声、節調、呼吸、詩心 その他などがあり、これらをバランス良く吟ずることが求められ、その修得には大変な努力が必要であることを学んで来た。

- (1) その中で、吟詠は大きくは、言葉(熟語)と節(余韻)で構成され、「言葉」は吟詠の骨格となるもので、詩文を構成している一つ一つの言葉を正しく読み、正しいアクセントやイントネーションにより、本来日本語がもつ音楽性、感激性を表現しなければならぬ

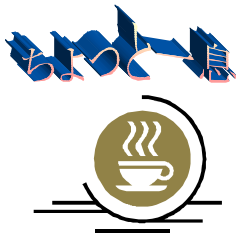
い。つまり、詩文を構成している一小節毎の熟語を間延びをさせず、落ち着いてはっきり発音し、それに続く助動詞や動詞も切り離さず続けて読むことである。難しいのは、単に吟ずるだけで一つ一つの「言葉」が十分練れていなくて、「言葉」に真心が込められていないと、如何に名調子で美声であっても人に感動を与える事は出来ない吟詠となる。

- (2) 次に、詩心を表現する上で大事な事は、「発声」で、声量、声幅、声の高低、美しさは個人差がありどのような声であっても、日頃の鍛錬によって深みと味わいのある発声ができることを体験している。
- (3) 節調は各流派それぞれ異なる。吟詠の旋律は短音階（陰旋律）に属し、独特の重厚味と哀調をもっている。「ミ」の音を主音とし、通常は、「ラシドミファラシド」の八音からなり、「レソ」の二音は「吟変わり」として例外的に使用する。節調も一詩毎修練する中で身に付けて行くものだとして認識している。
- (4) 吟詠の修得の中で、「呼吸」は重視して取り組んでいる。古く江戸時代においては、一句を一息、絶句を四息で吟じていたといわれる。当時はそれだけ節が単調で、全体を短く吟じたことによる。その後は、絶句を六節（息ともいう）に分けて吟じるようになるが、現在では一句を三息、絶句を十二息で吟じることが一般的であり、その方が自然に吟じられると思われる。吟詠の呼吸は、素早く、深く、音を立たないように息を吸い、細く長く息を吐くことが原則で、別途、坐禅にも親しんでいるが、そこでも複式呼吸が原則的であり、相通じるものである。この呼吸法が、「吟詠は健康に有効」と言われる所以である。
- (5) 最後に「詩心表現」は、吟詠で最も大切な事で、その他の技術（言葉、発声、節調、息）は、そのための手段であると言われる。詩心表現には、まず詩の内容と作者の「心」を良く把握しなければならない。また、「小節」や「間」の取り方など高度の技術を身に付け、吟詠力を高めると共に「一詩千遍」の言葉通り、一つの詩をできるだけ何回も繰返し練習することにより、詩によくなじむことが大切である。
- (6) その他、考慮すべき重要な事項として、
 - (一) 姿勢・態度の類で、吟詠の作法として、服装と共に態度は厳正でなければならない。同時に立派な吟詠には、正しい発声のできる姿勢をとることが望まれる。
 - (二) 伴奏をつけることにより、自分の声が一番合った音位で吟じ出しができる、吟者の感情が高まり、心のこもった吟詠ができる、吟詠を引き立たせ、聴き手により深い感銘を与える、などの利点がある。昭和初期までは、伴奏をつけることは邪道とされていたが、現在は、和楽器、洋楽器、シンセサイザーなどあらゆる楽器が伴奏として使われるようになったが、特に琴と尺八がよく使われる。
 - (三) どんな音楽でも主音（宮音）があるが、吟詠の場合は、特に主音が多く表れ、かつ「主音にかえる」という吟調の鉄則があるため、全体として落ち着きのある荘重な旋律になっている。吟詠の主音の音階は「ミの音」だが、人により音位が異なる。

八．「亀的」な地道の練習

上記の吟詠の技術を身につけるには、そう簡単なことではないことを習うごとに思い知らされる。そこでいろいろ試行錯誤の末、私なりの「練習」の考え方を組み立てた。吟詠の技術修得は、上記の要素を一つ一つ習得するには、同じ動作・発声に細かい繰返し練習が不可欠である。つまり、

「亀」の歩調に似た、一步一步の地道な練習が欠かせない。「地道な練習」とは、「道」が名のつくスポーツや芸道などは全てに共通することである。そこで、私なりの日常の「練習」の段階を四段階で取り組むことにしている。つまり、自分道場、稽古日道場、発表会等、全国コンクール、の四段階で吟詠技術の修得レベルの向上状況を確認することにしている。「吟詠」に関する評価のカテゴリーには、声質、技術、詩心、態度、発音、調和、等があり、それぞれのカテゴリーにおいて、1～5段階の成長段階があるとの考え方である。



第一生命が毎年「サラリ - マン川柳コンクール」を発表しています。

傑作をご披露します。

(本件は第一生命様から転載の承認を得ております)

先読めぬ上司の口ぐせ “先を読め” 先見の明
おだてられ登った木の枝 すぐ折れた。 サラ川マン
まかしとけ きこと誰かがやるだろっつ せとっち
あのホトル まだあるはずの店がない 独楽
その昔 口説いた結果の自己責任 妻を娶らば……

第十八回 第一生命サラリマン川柳コンクールより